

総務省から海外機関へ

幅広いフィールドで活躍する職員

国連統計部

新垣 真輝 Arakaki Maki

ニューヨークの国連本部から

国際統計の発展のために

私は今、研究員として、国連統計部でビジネス統計に関する基準策定、情報収集及び公表、各国の統計システム強化支援に携わっています。

国連では、日本を始めとする各国統計局及び関連機関の専門家によって、ビジネスの実態をより良く把握し、ビジネスと社会・環境とのつながりを明らかにするための手法など様々な課題についての議論が進められています。国連統計部は、これらの専門家会合を事務局として支えることで、国際統計の発展に寄与しています。

ここでの私のミッションは、統計先進国である日本が、国際統計の発展に貢献し続けられるよう、多国間調整の現場で情報収集を行うこと、そして国連統計部の一員として、専門家会合の資料作成、多国籍企業データ収集、統計ビジネスレジスターに関するオンライン研修教材開発などの業務を行い、知識と経験を得ることです。

点と点が広がり、つながっていく

総務省には、幅広い業務、研修、同僚と出会える機会があり、また、それらがつながりワクワクできる機会もあるかと思っています。

私の場合、統計局に入り、的確な統計を提供するためには、様々な協力者の声を聞き、社会経済情勢の変化に目を向け、地道に努力し続けることが大切だと先輩方から教わり、様々な業務に携わりながらも、英検や統計検定を受験したり、応用統計・データマイニングの修士号を取得したり、専門性を磨く時間を設けてきました。

それが今の国連の業務につながり、ここでも総務省で経験(国際会議に向けた調整、途上国への技術協力支援、地方自治体への研修など)は私の力となり、これまで勉強してきたことは私の土台となり、そして日本にいるビジネス統計など関連分野で経験を積んだ同僚たちの存在が私の支えとなっていると感じています。



外務省在大韓民国日本国大使館 一等書記官

小林 信一 Kobayashi Shinichi

海外で日本を考える

海外で日本を考える

私は現在、外務省に出向し、韓国の日本国大使館で外交官として勤務しています。主に情報通信分野を担当し、現地政府とのやり取りのほか、当地の情報通信の動向把握や政策・制度の調査などを行っています。

ソウルは物価や生活水準は一部で日本を超えている部分もあり、発展の勢いを感じます。また、ICTが隅々まで活用され、行政手続もワンストップで効率よく行われるなど、暮らしてみても便利さに感嘆することも多いです。韓国は、何事にもスピードが重視される文化で、政府の動きも早く、技術革新が早い今の時代にフィットする面もあるようです。

このように、様々な面で日本との違いを意識させられ、多くの驚きや気づきがありますが、この気づきの中で何が日本の政策立案の参考になるか、日々考えながら仕事をしています。

幅広い可能性が魅力

職員は基本的に約2年毎に異動がありますが、私は、総務省に入省してからこれまで、電波、放送、電気通信の業務に従事したほか、

海外研修(メキシコ)や他機関への出向、南米ペルーの日本国大使館で勤務する機会もありました。特に海外勤務では、日本では経験できない業務に携われたほか、余暇に旅行し、その土地をじっくり見て回れたのも得がたい経験でした。

このように、総務省の業務は幅広く、様々な経験を積むことができ、好奇心が旺盛な方にも向いている職場です。私自身も好奇心が旺盛なほうなので、この点を魅力に感じています。また、これまで海外を含む様々な場所で勤務したことで、視野が広がり、自身の成長にもつながっていると思います。少しでも興味を持たれた方は、ぜひ総務省へ足を運んでみてください。



(一財)自治体国際化協会

柿本 克俊 Kakimoto Katsutoshi

アメリカで日本の地域を想う

海外で日本の地方自治体を支援

新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、私たちの生活を大きく変え、特に国境を超えた人の動きは大きく制限されることになりました。しかし、グローバル化の流れは変わることはなく、むしろ、モノ・金・情報の流動性は一層激しさを増し、それらは日本の地方自治体にも大きな影響を与えています。

私の勤務する自治体国際化協会は、全国の地方自治体の共同組織として、海外の7拠点に事務所を構え、諸外国における行政の視点や先進的な事例を調査・研究し、自治体における政策立案の参考にしてもらうとともに、デジタル化の進展やSDGsの推進等といった、社会経済情勢の変化を踏まえながら、地域産品の海外販路開拓やインバウンドの地方誘客等に取り組む地方自治体の支援を行っています。

経験という名の財産

総務省は、様々なフィールドに身を投じ、多様な目線・価値観を学びながら、地域のため、日本のために活躍できる場だと思っています。私はこれまで、霞が関や現在の海外勤務の他にも、地方自治体

で勤務する機会も得ることができましたが、これらの勤務は、より多くの人々との出会いを生み、自らの人間力を育むことに繋がっています。

また、これらの経験を通して得た知識や人脈は、一步引いた目線で、日本の制度や地域が抱える課題を考える際の財産にもなっています。

現在は、日本と同じような政策課題に直面する北米の自治体職員等と「今の激動の時代の中で、行政にとって何が最善か」を日々、議論しています。このように、様々な場所で貴重な経験を得ながら、日本の地域のこれからを考えることができるのは、総務省ならではの魅力だと思います。



外務省在チリ日本国大使館 一等書記官

輿石 美和 Koshiishi Miwa

デジタルハブを目指すチリにて

デジタルハブを目指すチリでの業務

私は、日本から遠く離れた地球の裏側の国「チリ」で、主に情報通信分野の情報収集やインフラ輸出に向けた日本企業支援を行っています。

チリは南米地域の「デジタルハブ」となることを目指しており、アジアと南米を結ぶ初の光海底ケーブル敷設プロジェクトを主導したり、昨年初めには南米初の5G導入国となる等デジタルインフラへの関心が非常に高い国です。そのため、日本の優れた先進技術の導入事例への関心も高く、総務省と大使館が連携してチリ政府向けのセミナーを開催する等両国の知見の共有を行っています。

また、霞が関とは異なりチリの大統領は小所帯のため、経済分野以外にも政治や文化といった分野の業務を経験することができます。昨年はオリパラホストタウンの業務を担当し、チリの選手たちと日本のホストタウンの橋渡し役を経験できました。

国内を経験した上で感じる国際関係業務の魅力

総務省への入省を決めた理由の1つは、情報通信を通じてグローバルな仕事ができるという点でした。最初の配属先である国際機

関を担当する部署では国際会議に出席する等、貴重な経験ができましたが、国際の場で活躍するためには国内のこともっと経験すべきと感じ、その後は国内分野の業務を経験

させてもらった上で、今、在外公館での業務ができていくことに大きなやりがいを感じています。

また、今、チリには十代の娘二人を連れてきていますが、幼少期には育児休業を活用して夫のインド駐在に帯同し、職場復帰後も時短勤務を活用しました。育児に手がかからなくなった今は、「ワークライフバランス」の観点で、職員の家庭事情と意向に応じた働き方ができる土壤があることも総務省の魅力の1つです。

